

グリーンクラブに学生部長賞

顕著な活動があったサークルを表彰する2007年度の学生部長賞に男声合唱団のグリーンクラブ(小林明頼代表・商2)が決まった。2月27日、生田キャンパスで表彰式が行われ、前代表の山口進さん(経済3)に嶋根克己学生部長から賞状と記念品が贈られた。

グリーンクラブは、定期演奏会のほか多摩区民祭出演や地域の合唱団との共演も活発に行っている。入学式では新入生に校歌の合唱指導を行う。



▲河口湖の合宿でのメンバー

自己啓発奨学生 指定試験奨学生

チャレンジと結果を応援

自己啓発奨学生

学術やスポーツなどの分野で優れた実績をあげた学生を奨励する「自己啓発奨学生」(出願制)。今年度は東洋経済新報社の経済論文コンテスト「高橋亀吉記念賞・佳作」となった大倉直也さん(経済1)＝写真中央＝、第44回全日本学生囲碁十傑戦で初優勝するなど好成績をあげている花巻未生さん(経済2)らに嶋根克己学生部長から支給された。ほかの奨学生は次のとおり(敬称略)。

▽河野文平(法2)＝スカッシュラケット愛好会所属。第35回全日本学生選手権個人戦準優勝、第30回関東学生選手権優勝など。▽雫石祐介(ネット情報4)、松山智志(同3)、高井実(同2)＝「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」アジア地区予選台北大会で52チーム中13位。▽綿引啓太(ネット情報2)＝情報処理技術者試験テクニカルエンジニア(情報セキュリティ)試験合格

指定試験奨学生

公認会計士試験などの資格試験に合格した学生(短答式含む)に奨学金を支給する「指定試験奨学生」への奨学金支給が2月26日、行われた。

今年度の支給者は次のとおり(敬称略)。▽公認会計士試験合格＝古渡裕之(商4)、原井常勝(同)、下田尚文(商3)、佐々木隆行(同)、小野寺英(同)▽公認会計士試験短答式試験合格＝長橋諭(商3)



▲▼自己啓発奨学生の皆さん



▲指定試験奨学生の皆さん

英語英米文学科・上村教授

「Composition」で絵本制作

英語英米文学科では、1年次で英語のスキル向上を目指したさまざまな授業を展開している。

単なる英文和訳ではなく、自分でアイデアをまとめ、表現することを学ぶ「Composition」の授業で、上村妙子教授は英語の絵本を半年間かけて制作する課題を出し、22人がこれに挑戦した。

上村教授は、絵本をたくさん読み(リーディング)、実際に書き(ライティング)、発表し(スピーキング)、それを聞いてコメントする(リスニング)という流れの中で、英語の4技能すべての向上を目指したという。



▲上村教授を中心に右へ1位の奥津悠介さん、3位の西村愛美さん。左は2位の大宮梨沙さんと左端は大学院生の岩瀬明日香さん

「物語には『物語文法』という普遍的な構造があります。その構造に気づかせ、その上で学生たちの独創性を引き出すことをねらいましたが、何よりも『英文を書く楽しさ』を体感してもらいたかったのです」と話す。大学院生の岩瀬明日香さんからアドバイスをもらい、独自の絵本を完成させた学生たちは、「自分で考え、ビジュアル表現をつくり出すことは初めてで時間はかかったが貴重な経験ができた」と振り返っている。

全員の投票で優秀作品を決定。作品は1月中、図書館本館ブラウジングプラザで展示された。

黒沢真里子准教授の「リーディング」の速読の授業で数多くのペーパーバックを読んだことが大いに役立ったと話す学生もいて、他の英語の授業との連携の可能性を見いだせたことも、教える側として参考になったと上村教授は話している。

川崎市・スピーチ・コンテスト

特別聴講生 徐康源さんが最優秀賞獲得

「第14回外国人市民による日本語スピーチコンテストプログラム」((財)川崎市国際交流協会主催、川崎市教育委員会後援)で、特別聴講生の徐康源さん(韓国・檀国大学から交換留学)が見事最優秀賞に輝いた。

2月16日、川崎市国際交流センターで行われた同コンテストには11人が出場。

徐さんは日本人と韓国人の焼き肉の食べ方の違いを、ユーモアを交えて語り、会場の笑いを誘った。昨年開催された本学のスピーチコンテストでも1位に輝き、「途中で自分が何を話しているのか分からなくなるほど緊張しました。会場の方々に楽しんでもらえてよかったです」と喜びを語っていた。



▲壇上の徐さん

ドイツの留学生 附属高生と交流

1月30日、ドイツのマルティン・ルター大学ハレヴィッテンベルクからの留学生らが専修大学附属高校(東京都杉並区・鈴木高弘校長)を訪ね、生徒と交流。有意義なひとときを過ごした=写真。



訪問したのは、同大学政治学・日本学科生で本学特別聴講生のイヴォン・リシュケさんとイザベル・マウエさん、ドイツ留学の経験がある新島拓さん(経済3)と浅野香さん(経済2)の4人。参加の附属高生15人は、ドイツ料理やヨーロッパの建築様式についての話を熱心に聴いていた。

◀New Ground - 新しい見方<21>▶

「『卒業する』ということ」

たまに、本当にたまにだが、ふと自分が進んでいるのか立ち止まっているのかそれとも後戻りしているのか、分からなくなる時がある。別に地図的に場所を移動しているとかそういう話ではない。ただ一瞬、自分という存在の「立ち位置」とか「道程」とか、そういったものを見失ってしまう。「不安定」になるというか、「迷子」になるというか。ぼーっとしていたら親に置いていかれてしまった子供のような、そんな不安感だったり、知らない場所で同じ道をぐるぐると回っていたことに気づいた時の逼迫(ひっぱく)した感じだったり、自分でも良く分からないような感情が一気に打ち寄せてきて、そうして見失う。

そうすると、今度はどこに、どっちに進んでいいのか分からなくなる。最初の一步が踏み出せない。自分はどっちに行きたいのか、どこを目指しているのか。決められた道はなくて、選択し得る可能性はそれこそ無限のようにあって、自身の行く末を示す「地図」はない。どの道を選んでもその先にあるのは落とし穴ではないのかとか、いろいろ考えてしまう。いや、考えるというよりも疑ってしまうと言った方が正しいのかもしれない。

このような状態に最も陥りやすいのが「卒業」という人生の岐路ではないだろうか。それが能動的か受動的かは別にして、「卒業」はありとあらゆる選択を強いてくる。小学生のころから続けた「学生」という身分からはずれ、「社会人」となるということは、それだけ意味の大きいイベントだ。

今年も多くの先輩方が卒業していく。その卒業生の方々の人数に比例する数だけさまざまな選択が行われ、それぞれの第一歩が踏み出されるのだろう。それはとても勇気のいることだと思う。そして、その一步を踏み出した先輩方を、私たちは心の底から尊敬する。

だからこそ、本当に、卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

《マンガ》

(漫画研究同好会)

